

# バスケットボールにおけるオフェンススタイルの確立

— 2006年FIBA世界選手権のゲーム分析から —

竹之下 秀 樹・長 門 智 史

## 1. 緒言

1891年、アメリカ・マサチューセッツ州にてジェームズ・ネイスミス氏によって考案されたバスケットボールは、その後、度重なるルール改定が繰り返され、競技の定義に関わる表現の仕方は少なからず変化してきたが、競技の本質は全くといって変化していない。それは利害相反し、対立関係にある二つのチームが、同一コート上に同時に存在し、一定の決められた時間内に「多くのゴールを得た方が勝者＝得点の多いチームが勝者」ということである。

このバスケットボールという競技について、日本では1930年に大日本バスケットボール協会（現在の財団法人日本バスケットボール協会）が設立され、国内での競技の普及と強化に努めてきた。男子の日本代表チームは、1936年にバスケットボールがオリンピックの正式種目になったベルリン大会に初出場し、その後、1976年のモントリオール大会（12カ国中11位）まで世界のトップレベルの舞台で戦い続けてきた。しかし、その後は低迷を続け30年以上に渡りオリンピックへの出場はない。そこで日本バスケットボール協会は、2002年に「JABBA変革21」と銘打ったバスケットボール界の活性化プランを打ち出し、世界に通用する日本代表チームの編成並びに国際的地位の確立を目指して、自国開催となる2006年FIBA世界選手権（予選ラウンド敗退）に臨んだ。し

かし、大会後は再び低迷を続け、アジア地区での戦いにも苦戦を強いられているのが現状である。

したがって、男子の日本代表チームが世界のトップレベルのチームと公式試合を行ったのは、この35年間の中では唯一2006年FIBA世界選手権予選ラウンドの試合のみであり、次代の日本代表チームの強化に向けて日本の目指すバスケットボールを構築するためには、改めてこの予選ラウンドの試合を見つめ直すことが急務と考えられる。

そこで、本研究では2006年FIBA世界選手権において日本代表チームが行った予選ラウンドの試合（ドイツ戦、アンゴラ戦、パナマ戦、ニュージーランド戦、スペイン戦）をデータ分析することによって、今後目指すべきバスケットボールのオフェンススタイルを確立することを目的とする。

## 2. 方法

VTR録画し保存していた2006年FIBA世界選手権で日本代表チームが行った予選ラウンドの試合について、それぞれの試合中に起こった全てのプレイを「Cyber Sports for Basketball (CYBERSPORTS USA社製)」にデータ入力し、その結果を分析した。各項目のデータ入力については日本バスケットボール協会が示す「BOXスコア規定マニュアル」を参考にした。

また、シュートチャートに入力する各シュートについては以下の分類に従った。

## 2.1 シュートシチュエーションによる分類

### ①トランジションオフェンス

フロントコートにおいてオフェンスとディフェンスが5対5でマッチアップされていない状態でシュートが成功した場合のシュートシチュエーションはトランジションオフェンスとした。このシュートシチュエーションはディフェンスの準備が整っていない状態での攻防であり、多くの場合はオフェンスチームのアウトナンバーにつながりやすく、オフェンスを優位に展開できるシチュエーションだと考えられる。

### ②セットオフェンス

フロントコートにおいてオフェンスとディフェンスが5対5でマッチアップされている状態で、かつ、シュートを成功させる過程においてオフェンスプレイヤー5人の動きに一定のパターンが見られた場合のシュートシチュエーションはセットオフェンスとした。オフェンスチームは組織化された一定のパターンに沿いながら、チームとして共通意識を持ってシュートセレクションを判断していくため、オフェンスを優位に展開できるシチュエーションだと考えられる。

### ③フリーランスオフェンス

フロントコートにおいてオフェンスとディフェンスが5対5でマッチアップされている状態で、かつ、シュートを成功させる過程においてオフェンスプレイヤー5人の動きに一定のパターンが見られない場合のシュートシチュエーションはフリーランスオフェンスとした。このシチュエーションではボールを持ったプレイヤー個人がシュートセレクションを判断してい

くため、チームとしての共通意識を持つことが難しく、上記二つのシチュエーションと比較するとオフェンスの優位性は低いと考えられる。

## 2.2 シュートエリアによる分類

### ①3ポイントシュート

3ポイントラインの外側から放たれたシュートは3ポイントシュートとした。

### ②ペリメーターシュート

3ポイントラインよりも内側で、かつ、制限区域よりも外側で放たれたシュートはペリメーターシュートとした。

### ③制限区域内シュート

制限区域の内側で放たれたシュートのうち、シュートを放ったオフェンスプレイヤーとゴールとの間にディフェンスプレイヤーが位置した状態でのシュートは制限区域内シュートとした。

### ④ゴール下シュート

制限区域の内側で放たれたシュートのうち、シュートを放ったオフェンスプレイヤーとゴールとの間にディフェンスプレイヤーが位置していない状態でのシュートはゴール下シュートとした。

## 2.3 ゴール下シュートの種類による分類

### ①レイアップシュート

ゴール下シュートの内、後述するダンクシュートとプットバックシュートに含まれないシュートはレイアップシュートとした。

### ②ダンクシュート

ゴール下シュートの内、ボールを直接ゴールの中へ叩き込むシュートはダンクシュートとした。

### ③プットバックシュート

ゴール下シュートの内、オフェンスリバウン

ド獲得直後に、その一連の動作の中で放たれたシュートはプットバックシュートとした。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 得点とフィールドゴールの結果

得点とフィールドゴールの結果は以下のとおりである（表1）。

##### (1) 得点

日本代表チームの総得点が322得点であったのに対して、対戦相手の総得点は393得点であり、その差は対戦相手の方が71得点上回っていた。一試合あたりの平均得点は、日本代表チームが64.4得点であったのに対して、対戦相手は78.6得点であり、その差は対戦相手の方が14.2得点上回っていたことになる。

##### (2) フィールドゴール

###### ①フィールドゴール試投数

日本代表チームのフィールドゴール試投数が282本であったのに対して、対戦相手のフィールドゴール試投数は317本であり、その差は対戦相手の方が35本上回っていた。一試合あたりの平均フィールドゴール試投数は、日本代表チームが56.4本であったのに対して、対戦相手は63.4本であり、その差は対戦相手の方が7.0本上回っていたことになる。

###### ②フィールドゴール成功数

日本代表チームのフィールドゴール成功数が

115本であったのに対して、対戦相手のフィールドゴール成功数は137本であり、その差は対戦相手の方が22本上回っていた。一試合あたりの平均フィールドゴール成功数は、日本代表チームが23.0本であったのに対して、対戦相手は27.4本であり、その差は対戦相手の方が4.4本上回っていたことになる。

###### ③フィールドゴール成功率

日本代表チームのフィールドゴール成功率が40.8%であったのに対して、対戦相手のフィールドゴール成功率は43.2%であり、その差は対戦相手の方が2.4%上回っていた。

#### 3.2 シュートシチュエーションによる分類結果

各シュートをシュートシチュエーションによって分類した結果は以下のとおりである（図1, 2）

##### (1) 日本代表チームのシュートシチュエーション

日本代表チームの総得点をシュートが成功したシチュエーション別に分類した結果、それぞれの割合は、トランジションオフェンスが20.9%、セットオフェンスに30.0%、フリーランスオフェンスが49.1%であった。

##### (2) 対戦相手のシュートシチュエーション

対戦相手の総得点をシュートが成功したシチュエーション別に分類した結果、それぞれ

表1 得点とフィールドゴールの結果

	得点	FG試投数	FG成功数	FG成功率
日本代表チーム	322 (64.4)	282 (56.4)	115 (23.0)	40.8%
対戦相手	393 (78.6)	317 (63.4)	137 (27.4)	43.2%

( ) 内は一試合平均の値

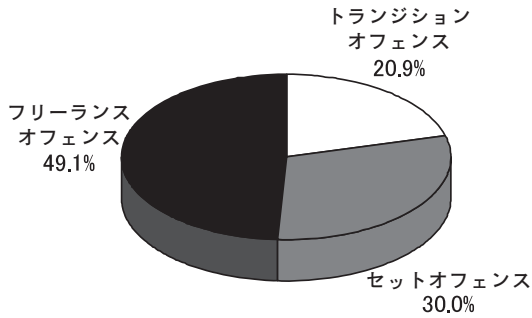


図1 日本代表チームのシュートシチュエーション

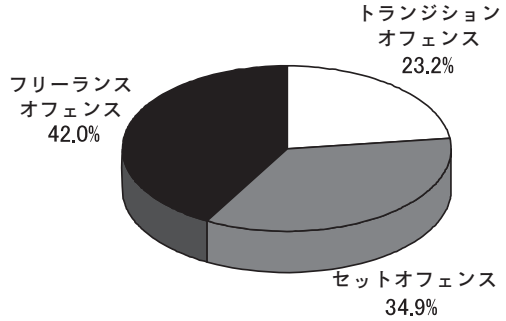


図2 対戦相手のシュートシチュエーション

の割合はトランジションオフェンスが23.2%、セットオフェンスにが34.9%、フリーランスオフェンスにが42.0%であった。

また、シュート試投数のエリア別の割合は以下のとおりである(図3, 4)。

### 3.3 シュートエリアによる分類結果

各シュートをシュートエリアによって分類した結果は以下のとおりである(表2)。

#### (1) 3ポイントシュート

##### ①3ポイントシュート試投数

日本代表チームの3ポイントシュート試投数が113本であったのに対して、対戦相手の3ポ

表2 シュートエリアによる分類結果

		3ポイント	ペリメーター	制限区域内	ゴール下
日本代表チーム	試投数	113 (22.6)	69 (13.8)	15 (3.0)	85 (17.0)
	成功数	37 (7.4)	25 (5.0)	6 (1.2)	47 (9.4)
	成功率	32.7%	36.2%	40.0%	55.3%
対戦相手	試投数	92 (18.4)	59 (11.8)	69 (13.8)	97 (19.4)
	成功数	33 (6.6)	13 (2.6)	30 (6.0)	61 (12.2)
	成功率	35.9%	22.0%	43.5%	62.9%

( ) 内は一試合平均の値

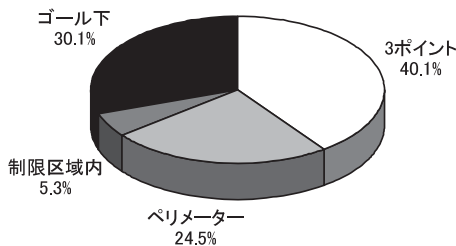


図3 日本代表チームのシュート試投数のエリア別割合

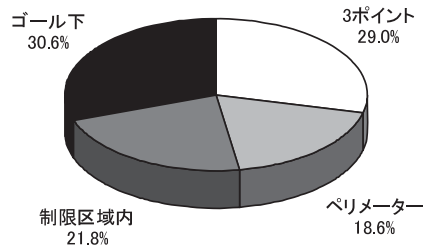


図4 対戦相手のシュート試投数のエリア別割合

イントシュート試投数は92本であり、その差は日本代表チームの方が21本上回っていた。一試合あたりの平均3ポイントシュート試投数は、日本代表チームが22.6本であったのに対して、対戦相手は18.4本であり、その差は日本代表チームの方が4.2本上回っていたことになる。

#### ②3ポイントシュート成功数

日本代表チームの3ポイントシュート成功数が37本であったのに対して、対戦相手の3ポイントシュート成功数は33本であり、その差は日本代表チームの方が4本上回っていた。一試合あたりの平均3ポイントシュート成功数は、日本代表チームが7.4本であったのに対して、対戦相手は6.6本であり、その差は日本代表チームの方が0.8本上回っていたことになる。

#### ③3ポイントシュート成功率

日本代表チームの3ポイントシュート成功率が32.7%であったのに対して、対戦相手の3ポイントシュート成功率は35.9%であり、その差は対戦相手の方が3.2%上回っていた。

### (2) ペリメーターシュート

#### ①ペリメーターシュート試投数

日本代表チームのペリメーターシュート試投数が69本であったのに対して、対戦相手のペリメーターシュート試投数は59本であり、その差は日本代表チームの方が10本上回っていた。一試合あたりの平均ペリメーターシュート試投数は、日本代表チームが13.8本であったのに対して、対戦相手は11.8本であり、その差は日本代表チームの方が2.0本上回っていたことになる。

#### ②ペリメーターシュート成功数

日本代表チームのペリメーターシュート成功

数が25本であったのに対して、対戦相手のペリメーターシュート成功数は13本であり、その差は日本代表チームの方が12本上回っていた。一試合あたりの平均ペリメーターシュート成功数は、日本代表チームが5.0本であったのに対して、対戦相手は2.6本であり、その差は日本代表チームの方が2.4本上回っていたことになる。

#### ③ペリメーターシュート成功率

日本代表チームのペリメーターシュート成功率が36.2%であったのに対して、対戦相手のペリメーターシュート成功率は22.0%であり、その差は日本代表チームの方が14.2%上回っていた。

### (3) 制限区域内シュート

#### ①制限区域内シュート試投数

日本代表チームの制限区域内シュート試投数が15本であったのに対して、対戦相手の制限区域内シュート試投数は69本であり、その差は対戦相手の方が54本上回っていた。一試合あたりの平均制限区域内シュート試投数は、日本代表チームが3.0本であったのに対して、対戦相手は13.8本であり、その差は対戦相手の方が10.8本上回っていたことになる。

#### ②制限区域内シュート成功数

日本代表チームの制限区域内シュート成功数が6本であったのに対して、対戦相手の制限区域内シュート成功数は30本であり、その差は対戦相手の方が24本上回っていた。一試合あたりの平均制限区域内シュート成功数は、日本代表チームが1.2本であったのに対して、対戦相手は6.0本であり、その差は対戦相手の方が4.8本上回っていたことになる。

#### ③制限区域内シュート成功率

日本代表チームの制限区域内シュート成功率

が40.0%であったのに対して、対戦相手の制限区域内シュート成功率は43.5%であり、その差は対戦相手の方が3.5%上回っていた。

#### (4) ゴール下シュート

##### ①ゴール下シュート試投数

日本代表チームのゴール下シュート試投数が85本であったのに対して、対戦相手のゴール下シュート試投数は97本であり、その差は対戦相手の方が12本上回っていた。一試合あたりの平均ゴール下シュート試投数は、日本代表チームが17.0本であったのに対して、対戦相手は19.4本であり、その差は対戦相手の方が2.4本上回っていたことになる。

##### ②ゴール下シュート成功数

日本代表チームのゴール下シュート成功数が47本であったのに対して、対戦相手のゴール下シュート成功数は61本であり、その差は対戦相手の方が14本上回っていた。一試合あたりの平均ゴール下シュート成功数は、日本代表チームが9.4本であったのに対して、対戦相手は12.2本であり、その差は対戦相手の方が2.8本上回っていたことになる。

##### ③ゴール下シュート成功率

日本代表チームのゴール下シュート成功率が

55.3%であったのに対して、対戦相手のゴール下シュート成功率は62.9%であり、その差は対戦相手の方が7.6%上回っていた。

#### 3.4 ゴール下シュートの種類による分類結果

ゴール下シュートをその種類によって分類した結果は以下のとおりである(表3)。

また、ゴール下シュート試投数の種類別の割合は以下のとおりである(図5, 6)。

##### (1) レイアップシュート

###### ①レイアップシュート試投数

日本代表チームのレイアップシュート試投数が77本であったのに対して、対戦相手のレイアップシュート試投数は66本であり、その差は日本代表チームの方が11本上回っていた。一試合あたりの平均レイアップシュート試投数は、日本代表チームが15.4本であったのに対して、対戦相手は13.2本であり、その差は対戦相手の方が2.2本上回っていたことになる。

###### ②レイアップシュート成功数

日本代表チームのレイアップシュート成功数が41本であったのに対して、対戦相手のレイアップシュート成功数は39本であり、その差は日本代表チームの方が2本上回っていた。

表3 ゴール下シュートの種類による分類結果

		レイアップ	ダンク	プットバック
日本代表チーム	試投数	77 (15.4)	7 (1.4)	1 (0.2)
	成功数	41 (8.2)	5 (1.0)	1 (0.2)
	成功率	53.2%	71.4%	100.0%
対戦相手	試投数	66 (13.2)	6 (1.2)	25 (5.0)
	成功数	39 (7.8)	6 (1.2)	16 (3.2)
	成功率	59.1%	100.0%	64.0%

( ) 内は一試合平均の値

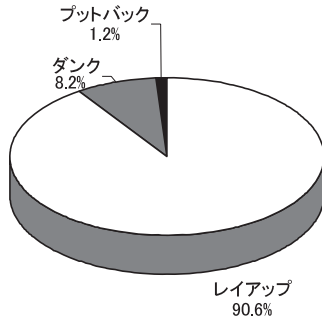


図5 日本代表チームのゴール下シュート試投数の種類別割合

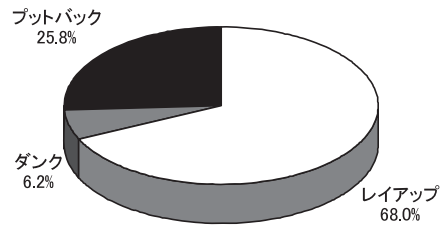


図6 対戦相手のゴール下シュート試投数の種類別割合

一試合あたりの平均レイアップシュート成功数は、日本代表チームが8.2本であったのに対して、対戦相手は7.8本であり、その差は日本代表チームの方が0.4本上回っていたことになる。

### ③レイアップシュート成功率

日本代表チームのレイアップシュート成功率が53.2%であったのに対して、対戦相手のレイアップシュート成功率は59.1%であり、その差は対戦相手の方が5.9%上回っていた。

## (2) ダンクシュート

### ①ダンクシュート試投数

日本代表チームのダンクシュート試投数が7本であったのに対して、対戦相手のダンクシュート試投数は6本であり、その差は日本代表チームの方が1本上回っていた。一試合あたりの平均ダンクシュート試投数は、日本代表チームが1.4本であったのに対して、対戦相手は1.2本であり、その差は日本代表チームの方が0.2本上回っていたことになる。

### ②ダンクシュート成功数

日本代表チームのダンクシュート成功数が5本であったのに対して、対戦相手のダンクシュート成功数は6本であり、その差は対戦相手の方が1本上回っていた。一試合あたりの平

均ダンクシュート成功数は、日本代表チームが1.0本であったのに対して、対戦相手は1.2本であり、その差は対戦相手の方が0.2本上回っていたことになる。

### ③ダンクシュート成功率

日本代表チームのダンクシュート成功率が71.4%であったのに対して、対戦相手のダンクシュート成功率は100.0%であり、その差は対戦相手の方が28.6%上回っていた。

## (3) プットバックシュート

### ①プットバックシュート試投数

日本代表チームのプットバックシュート試投数が1本であったのに対して、対戦相手のプットバックシュート試投数は25本であり、その差は対戦相手の方が24本上回っていた。一試合あたりの平均プットバックシュート試投数は、日本代表チームが0.2本であったのに対して、対戦相手は5.0本であり、その差は対戦相手の方が4.8本上回っていたことになる。

### ②プットバックシュート成功数

日本代表チームのプットバックシュート成功数が1本であったのに対して、対戦相手のプットバックシュート成功数は16本であり、その差は対戦相手の方が15本上回っていた。一試合あたりの平均プットバックシュート成功数

は、日本代表チームが0.2本であったのに対して、対戦相手は3.2本であり、その差は対戦相手の方が3.0本上回っていたことになる。

### ③プットバックシュート成功率

日本代表チームのプットバックシュート成功率が100.0%であったのに対して、対戦相手のプットバックシュート成功率は64.0%であり、その差は日本代表チームの方が36.0%上回っていた。

## 3.5 その他のシュートに関する結果

その他のシュートに関する結果は以下のとおりである（表4）。

表4 その他のシュートに関する結果

		フリースロー	P/S
日本代表チーム	試投数	82 (16.4)	1.00
	成功数	55 (11.0)	
	成功率	67.10%	
対戦相手	試投数	131 (26.2)	1.03
	成功数	86 (17.2)	
	成功率	65.60%	

( ) 内は一試合平均の値

### (1) フリースロー

#### ①フリースロー試投数

日本代表チームのフリースロー試投数が82本であったのに対して、対戦相手のフリースロー試投数は131本であり、その差は対戦相手の方が49本上回っていた。一試合あたりの平均フリースロー試投数は、日本代表チームが16.4本であったのに対して、対戦相手は26.2本であり、その差は対戦相手の方が9.8本上回っていたことになる。

#### ②フリースロー成功数

日本代表チームのフリースロー成功数が55

本であったのに対して、対戦相手のフリースロー成功数は86本であり、その差は対戦相手の方が31本上回っていた。一試合あたりの平均フリースロー成功数は、日本代表チームが11.0本であったのに対して、対戦相手は17.2本であり、その差は対戦相手の方が6.2本上回っていたことになる。

#### ③フリースロー成功率

日本代表チームのフリースロー成功率が67.1%であったのに対して、対戦相手のフリースロー成功率は65.6%であり、その差は日本代表チームの方が1.5%上回っていた。

### (2) シュート1本あたりの獲得得点 (P/S)

日本代表チームと、対戦相手のそれぞれの総得点 (P) を総シュート数 (S) で除することによって。シュート1本あたりの獲得得点を求めることができる。この計算によって求められた値は、日本代表チームが1.00点であったのに対して、対戦相手は1.03点であり、その差は対戦相手の方が0.03点上回っていた。

## 3.6 得点およびシュートに関する考察

まず、シュートシチュエーションによってシュートを分類した結果、対戦相手の方がトランジションオフenseとセットオフenseの割合が高く、より有効なオフenseを展開していたと判断できる。

フィールドゴール試投数の内訳から、日本代表チームは3ポイントシュートとペリメーターシュートというアウトサイドからのシュートが全体の半数を超えており、オフenseの起点をアウトサイドにおいていたと判断できる。インサイドでのシュートはゴール下シュートが大半を占めており、制限区域内においてディフェンスと対峙した状態でのシュートは極僅かであっ



た。したがって、日本代表チームの主なオフェンスパターンはアウトサイドを起点とした3ポイントシュート、ペリメーターでのジャンプシュート、ドライブインからのゴール下シュートといえる。

一方、対戦相手はゴール下シュートと制限区域内シュートというインサイドからのシュートが全体の半数を超えており、オフェンスの起点をインサイドにおいていたと判断できる。また、ゴール下シュート97本の内25本はプットバックシュートであり、オフェンスリバウンドからのセカンドチャンスでもインサイドを攻撃することに成功している。加えて、フリースローによる加点も非常に多く、インサイドに起点において制限区域内を積極的に攻撃することでシュートファウルを得ることに成功した結果といえる。したがって、対戦相手の主なオフェンスパターンはインサイドを起点としたポストプレイ、3ポイントシュート、ペリメーターでのジャンプシュート、オフェンスリバウンドからのプットバック、ファウルを得てのフリースローといえる。

日本代表チームと対戦相手のそれぞれのオフェンスパターンは大きく異なるが、合計でのシュート1本あたりの獲得得点の差は僅か0.03点であった。しかし、それぞれの合計得点に71得点もの差が生じたのは、フィールドゴールとフリースローの試投数および成功数に圧倒的な差があったからであると推察できる。

そこで、フィールドゴールとフリースローの試投数および成功数に影響を与えたと考えられるシュート以外のその他の項目にも着目する。

### 3.7 得点およびシュート以外の項目の結果

得点およびシュート以外の項目の結果は以下のとおりである（表5）。

#### (1) リバウンド

##### ①リバウンド数

日本代表チームのリバウンド数が146本であったのに対して、対戦相手のリバウンド数は238本であり、その差は対戦相手の方が92本上回っていた。一試合あたりの平均リバウンド数は、日本代表チームが29.2本であったのに対して、対戦相手は47.6本であり、その差は対戦相手の方が18.4本上回っていたことになる。

##### ②リバウンド獲得率

日本代表チームのリバウンド獲得率が38.0%であったのに対して、対戦相手のリバウンド獲得率は62.0%であり、その差は対戦相手の方が24.0%上回っていた。

#### (2) オフェンスリバウンド

##### ①オフェンスリバウンド数

日本代表チームのオフェンスリバウンド数が27本であったのに対して、対戦相手のオフェンスリバウンド数は89本であり、その差は対戦相手の方が62本上回っていた。一試合あた

表5 得点およびシュート以外の項目の結果

	Rebound			Foul	TurnOver	Steal	BlockShot
	Off.	Def.	Total				
日本代表チーム	27 (5.4)	119 (23.8)	146 (29.2)	114 (22.8)	76 (15.2)	33 (6.6)	13 (2.6)
対戦相手	89 (17.8)	149 (29.8)	238 (47.6)	99 (19.8)	81 (16.2)	40 (8.0)	24 (4.8)

( )内は一試合平均の値

りの平均オフェンスリバウンド数は、日本代表チームが5.4本であったのに対して、対戦相手は17.8本であり、その差は対戦相手の方が12.4本上回っていたことになる。

#### ②オフェンスリバウンド獲得率

日本代表チームのオフェンスリバウンド獲得率が15.3%であったのに対して、対戦相手のオフェンスリバウンド獲得率は42.8%であり、その差は対戦相手の方が27.5%上回っていた。

### (3) ディフェンスリバウンド

#### ①ディフェンスリバウンド数

日本代表チームのディフェンスリバウンド数が119本であったのに対して、対戦相手のディフェンスリバウンド数は149本であり、その差は対戦相手の方が30本上回っていた。一試合あたりの平均ディフェンスリバウンド数は、日本代表チームが23.8本であったのに対して、対戦相手は29.8本であり、その差は対戦相手の方が6.0本上回っていたことになる。

#### ②ディフェンスリバウンド獲得率

日本代表チームのディフェンスリバウンド獲得率が57.2%であったのに対して、対戦相手のディフェンスリバウンド獲得率は84.7%であり、その差は対戦相手の方が27.5%上回っていた。

### (4) パーソナルファウル

#### ①パーソナルファウル数

日本代表チームのパーソナルファウル数が114回であったのに対して、対戦相手のパーソナルファウル数は99回であり、その差は日本代表チームの方が15回上回っていた。一試合あたりの平均パーソナルファウル数は、日本代表チームが22.8回であったのに対して、対戦相手は19.8回であり、その差は日本代表チー

ムの方が3.0回上回っていたことになる。

### (5) ターンオーバー

日本代表チームのターンオーバー数が76回であったのに対して、対戦相手のターンオーバー数は81回であり、その差は対戦相手の方が5回上回っていた。一試合あたりの平均ターンオーバー数は、日本代表チームが15.2回であったのに対して、対戦相手は16.2回であり、その差は対戦相手の方が1.0回上回っていたことになる。

### (6) スティール

日本代表チームのスティール数が33回であったのに対して、対戦相手のスティール数は40回であり、その差は対戦相手の方が7回上回っていた。一試合あたりの平均スティール数は、日本代表チームが6.6回であったのに対して、対戦相手は8.0回であり、その差は対戦相手の方が1.4回上回っていたことになる。

### (7) ブロックショット

日本代表チームのブロックショット数が13回であったのに対して、対戦相手のブロックショット数は24回であり、その差は対戦相手の方11回上回っていた。一試合あたりの平均ブロックショット数は、日本代表チームが2.6回であったのに対して、対戦相手は4.8回であり、その差は対戦相手の方が2.2回上回っていたことになる。

## 3.8 得点およびシュート以外の項目に関する考察

シュートに引き続きオフェンスリバウンドを獲得することでセカンドチャンスを得ることができ、その数だけ攻撃回数が増す。そこで得ら

れたセカンドチャンスのオフェンスでシュートを打てばフィールドゴールの試投数の増加に直結し、さらに、オフェンスリバウンドの獲得直後にプットバックによる確率の高いシュートを打つことができればシュートの成功率も著しく高くなる。したがって、リバウンドは得点およびシュートに対して非常に大きな影響をもたらす要因であり、日本代表チームはこの点で非常に不利な状況にあったことが分かる。

また、ターンオーバーはシュートに至ることができないまま攻防が入れ替わるため、フィールドゴールやフリースローのシュート試投数の増減に大きく関わる項目である。ターンオーバーの種類は大きく二つに分類することができ、一つはオフェンスチームがバイオレーションを犯したことによりディフェンスチームのスローインからゲームが再開されるパターンである。もう一つはディフェンスチームがスティールに成功し、コート上で瞬時に攻防が切り替わるパターンである。一つ目のスローインで再開されるパターンの場合、ターンオーバーを犯したオフェンスチームは次のプレイがスローインで再開される前にディフェンスの準備を整えることができる。しかし、スティールに伴うターンオーバーを犯した場合では、コート上で攻防が瞬時に切り替わるため、ターンオーバーを犯したオフェンスチームは次のディフェンスの準備を整えることが非常に困難である。よって、スティールに成功したチームはトランジションオフェンスのシチュエーションでシュートを狙うことが容易となる。

日本代表チームのターンオーバーの回数は対戦相手よりも若干少ないため、この点では優位である。しかし、スティール数でも対戦相手を下回っているため、日本代表チームはターンオーバー後のオフェンスを優位に展開できてい

るとはいえない。

したがって、ターンオーバーとスティールはフィールドゴールやフリースローのシュート試投数の増減や、その後のシュートシチュエーションに大きな影響をもたらす要因であり、この点で日本代表チームは不利な状況にあったことが分かる。

ブロックショットによって阻まれたシュートもシュート試投数の中に含まれるが、そのシュートは成功する可能性を無くしリバウンドボールとなる。したがって、ブロックショットはシュート成功率を低下させる大きな要因であり、この点でも日本代表チームは対戦相手と比較して不利な状況にあったことが分かる。

#### 4. まとめ

本研究の結果から、今後の日本代表チームが目指すオフェンススタイルの要点は以下の5点に集約できる。

##### (1) スティール、リバウンドからのトランジションオフェンス

オフェンスのプレイをより有利なトランジションオフェンスから展開するためには、コート上で瞬時に攻防が入れ替わるスティールを誘発しなければならない。また、ディフェンスリバウンドを確実に獲得することもトランジションオフェンスへのスムーズな移行に不可欠であるため、攻撃的なディフェンスから確実にディフェンスリバウンドを獲得することが望まれる。

##### (2) 洗練されたセットオフェンス

シュートセレクションの判断をチーム全員に共通理解させるために、シュートシチュエー

ションをコントロールし、セットオフenseの精度を高めていく必要がある。

### (3) バリエーション豊かなゴール下シュート

ゴール下シュートのバリエーションを増やし、その精度を高めることが求められる。特に、ポストピボットプレイからステップを駆使した各種シュートの習得が急務である。

また、制限区域内を積極的に攻撃することで相手のファウルを誘発することにもつながる。ファウルを得ることでフリースローでの加点につながる他、バスケットカウントによる3点プレイ（ディフェンスのファウルを誘いバスケットカウントシュートとボーナス・フリースローでの3点プレイ）を意識的に狙っていくことも求められよう。

### (4) 高確率なアウトサイドシュート

制限区域内を積極的に攻撃することで相手ディフェンスをインサイドに収縮させることに成功すれば、3ポイントやペリメーターでの高確率なシュートが必要となる。一方、高確率なアウトサイドシュートがあればディフェンスをアウトサイドへ引き出すことが可能となり、手薄となるインサイドをより攻撃することが可能となるだろう。

## 5. 組織化されたオフenseリバウンド

オフenseの最後は必ずリバウンドを争って終われるようオフenseリバウンドを組織化する必要がある。オフenseリバウンドを獲得できれば単純に攻撃回数が増加するだけでなく、プットバックなどゴール近辺での高確率なシュートにつながる可能性が非常に高い。

本研究にて、2006年FIBA世界選手権予選ラウンドで日本代表チームが行った試合を分析することで、次代の日本代表チームが目指すべきオフenseスタイルを具体的な5点に集約することができた。今後の課題としては、日本における各カテゴリーのチームが行う試合の様相や、各チームでの指導を本研究の示すオフenseスタイルと比較し、次代の日本代表チームの強化へと発展させていきたい。

(本稿は2009年度名古屋学院大学商学部研究奨励金による研究成果の一部である。)

## 引用・参考文献

- 吉井四郎(1986) バスケットボール指導全書1, 大修館書店
- 吉井四郎(1987) バスケットボール指導全書2, 大修館書店
- 吉井四郎(1989) バスケットボール指導全書3, 大修館書店
- 吉井四郎(1977) バスケットボールのコーチング 基礎技術編 大修館書店
- 吉井四郎(1977) バスケットボールのコーチング 戦法・作戦編 大修館書店
- 李宇載(1996) ステップアップスポーツバスケットボール, 池田書店
- 李宇載(2008) 韓流シューター 育成&活用術, ベースボールマガジン社
- 倉石平(2000) 倉石平のバスケットボールファンダメンタルドリルオフense編, ベースボールマガジン社
- ボブ・ナイト&ピート・ニューエル: 笠原成元他訳(1992) ウイニング・バスケットボール, 大修館書店
- ジェリー・クロウゼ(編): 水谷豊他訳(1997) バスケットボールコーチングバイブル, 大修館書店
- ジョン・ウドゥン: 武井光彦他訳(2000) UCLAバスケットボール, 大修館書店